



М У Т Ъ

『MYTH (ミルス)』

【myth】 [mi ㊦]

1 神話、伝説 2 つくり話 3 架空の人

\* basic text : 孤独の発明／ポール・オースター (柴田元幸・訳) ／新潮文庫

「登場人物」

○息子

○父

○友人

○弁護士

#プロローグ

舞台は、円形部分だけを使用する。

どことなくアール・デコを思わせる舞台。

象徴的に置かれたロッキングチェア。

舞台上に一カ所、意味不明に穴が開いている。(登場人物はその穴を気にしない)

その穴のそばに、腰掛けられるようなところがある。

客席最前列の数カ所に、舞台へ上がるためのステップが設けられている。

父の家である。

客入れの音楽が消える。

すきま風のような音が聞こえている。

その音に合わせて、客席の明かりが消えると、舞台上の穴から強い光が天井に向かって立ち上がる。

ロッキングチェアが、ひとりでにゆっくりと揺れ始める。

静かな音楽。

客席扉が開き男が現れる。

父である。

父、黒い衣装を着ている。

客席外周を歩き、やがて、ゆっくりと舞台上上がり、ロッキングチェアに手をかける。

ロッキングチェアの揺れが止まる。

穴からの光がふわっと消える。

何かが吸い込まれる音のアクセント。

同時に音楽が消える。

非常に短い暗転。

再び照明がつく。

すきま風のような音が聞こえている。

父の姿は消えている。(床の一部が開閉式になっていて、その中に隠れる)

かわりに、客席通路に友人が立っている。

友人、無表情にロッキングチェアを見つめて立っている。

客席扉が開く。

弁護士に先導されて、息子が、客席扉から現れる。

息子、白い衣装を着ている。

友人、黒い衣装を着ている。

弁護士はスーツ姿。

弁護士 「どうぞ、こちらです。でも、ちょうどお帰りになられているときでよかったです。

ほとんど日本にいらっしやらないとか」

息子 「ええ、まあ」

友人、舞台に飛び乗る。

友人 「なんか、陰気臭い家だなあ」

弁護士 「この建物は1920年代から1930年代にかけてヨーロッパの装飾美術を席卷したアール・

デコ様式を用いて建てられた由緒正しい建築物です。フランス人デザイナーが、主要部分を設計、内部装飾もフランスをはじめとする外国から輸入されたものが多用されています。建物自体が美術品といえると思います」

友人 「アンティーク趣味だったのか、おまえのオヤジ」

息子 「(友人に) 静かにしてろ」

弁護士 「は？」

息子 「なんでもありません」

友人 「ちよっと他の部屋を見てきてもいい？」

弁護士 「部屋は全部で六部屋あります」

息子 「(友人に) ああ」

友人、舞台から下りて、客席内をうろろろする。

弁護士は、最初から友人の行動を特に気に留めていない。

弁護士 「……お父上が遺されたものは、この家と土地、それと家の中にあるものすべてです」

息子 「貯金とか、株とか、そういうものは？」

弁護士 「動産ですね。この家の中にあるもの以外は、すべて寄付されました」  
息子 「どこに？」

弁護士 「それは公にしたくない、というご意向です」

息子 「そうですか」

弁護士 「どのくらいの額だったか気になりますか？」

息子 「べつに」

弁護士 「お父上は遺言書で、この家と土地、それと家の付帯物——家具、美術品、本などのすべてをあなたに遺贈すると申されています」

息子 「子供は僕しかいないんですか？」

弁護士 「はい。法定相続人もあなたお一人です」

息子 「じゃあ、この家と土地が全部僕のものになるってこと？」

弁護士 「そうです。しかし、相続なさるなら、相続税がかかります」

息子 「でしょうね」

弁護士 「あなたは、相続や遺贈で財産をもらった人で、財産をもらったときに日本国内に住所を有している人、に当たりますので、課税される財産の範囲は、もらった財産すべてになります」

息子 「回りくどい言い方ですね」

弁護士 「法律とはそういうものです、悪しからず」

息子 「先を続けてください」

弁護士 「相続税の申告と納税は、お父上がお亡くなりになったのを知った日の翌日から、十ヶ月以内に行わなければなりません」

息子 「払えませんか」

弁護士 「相続税の納税については、何年かにわたって金銭で納める延納と相続等でもらった財産そのもので納める物納という制度があります。そうすれば、家と土地を手放さずにすみますが」

息子 「いりません」

弁護士 「では、家と土地をお売りになって、家具や装飾品、本などをお手元に残しておかれたら……」

息子 「ものがあると困るんです。年中引越しですから。大半は海外だし」

弁護士 「でしたら、なおのこと、ここにお住みになられれば？」

息子 「だから、相続税を払えないんです。ほんとに貧乏なんですよ」

弁護士 「……」

息子 「それに金に換算してもらわないと、僕には遺品の価値もわからない」

弁護士 「お父上の遺されたものは、何もいらないと……」

息子 「ええ、全部売っちゃってください。いららないんだ、なんにも」

弁護士 「たしかに、死んだ人間の遺していった品々と対面するほど恐ろしいことはないですね。物はそれ自体生命をもたない。それらが意味をもつのは、それを利用する人間の人生を指し示すものとしてではないんですから。でも、所有者の人生が終わるとき、物は変わる。もの自体としては同じであっても、それはそこにあり、同時にそこにはない。手で触れられる幽霊なんです」  
息子 「幽霊か、そりゃいいや。でも、そんなことじゃないんだ。純粹に経済的な問題。全部売って税金払う以外方法ないんですよ……貯金も定職もないんで」

弁護士 「わかりました。売却に関しては、それほど面倒なことはないと思います。こういった物件を求

めている財力のある好事家(こごずか)は、かなりの数おられますから」

息子 「心当たりがおりなんですか？」

弁護士 「ええ、少しは」

息子 「それは助かります」

弁護士 「本当に、すべてお金を換えてかまわないんですね」

息子 「かまいません。相続税とか、そういうことは全部やっていただけですかももちろん、仕事としてやっていただくんですから、報酬はお支払いします」

弁護士 「お父上の思い出は何もいらない、と」

息子 「もともと思い出なんかないし、宝くじにでも当たったんだと考えることにします」

弁護士 「そうですね」

息子、ロッキングチェアに腰をかける。

友人、いつのまにか通路の階段に腰掛けている。

弁護士 「……何もお尋ねにならないんですね」

息子 「尋ねるって、何を？」

弁護士 「お父上のこと」

息子 「ああ」

弁護士 「普通、お尋ねになるでしょう」

息子 「そうですね？」

弁護士 「だってお父上なんですよ」

息子 「どんなことを訊けばいいんです、たとえば？」

弁護士 「それは……何をしていった人だったのかとか、再婚はしていたのかとか……」

息子 「申し訳ないけど興味ないんですよ」

弁護士 「どうして？」

息子 「ろくに顔も覚えてないんです。両親が離婚したのが二十八年も前のことで、最後に会ったのが二十一年くらい前のことだし……母は父のこといっさい話してくれなかったし、写真すら見たことないんですよ」

弁護士 「そうですね」

息子 「だから、はつきり言って、なんにも知らない赤の他人。そんな人に興味持てます？」

弁護士 「難しいですかね」

息子 「難しいとか、そういうことじゃなくてムリです……あ、誤解のないように言っておきますけど、べつに憎んでもいませんから。最初から僕の人生とは関わりがない人なんです」

弁護士 「なるほど」

息子 「あ、そうだ。これは聞いておかなくちゃ」

息子、立ち上がる。このとき、ロッキングチェアの向きが少し変わる。

弁護士 「なんでしょうっ？」

息子 「死因はなんでしたっけ？」

弁護士 「死因、ですか？」

息子 「だって、まだ還暦前だったんですよ。ずいぶん早死にじゃないですか」

弁護士 「五十八歳でした」

息子 「で、死因は？」

弁護士 「肝臓癌です」

息子 「癌か……やっぱり癌家系なのかなあ、やだなあ」

弁護士 「やだなあって……」

息子 「だってそうでしょ。今の今まで、赤の他人のようにまったく関係も持たずにきたのに、僕はそいつの遺伝子だけはしっかり受け継いでいるわけですよ。それだけはどうしようもなら」

弁護士 「ですね」

息子 「母も癌だったんですよ。僕が18のとき世界したんですが、両親ともに癌となると、僕も癌になる確率はいきなり高くなるでしょ……酒もタバコもやめるかなあ……」

弁護士 「……」

間。

息子 「父のこと、どれくらいご存じなんです？」

弁護士 「え？」

息子 「だって、何もお尋ねにならないんですね、っておっしゃるからには、少しは父のことをご存じなんでしょ」

弁護士 「私の知る限り、お父上は徹底的な個人主義で、仕事からプライベートまで、何もかもご自分でおやりになられてました」

息子 「なるほど要するに、父のことはよく知らないってことですね」

弁護士 「お若い頃から貯蓄をなされて、40代にはセミリタイアされたそうです」

息子 「スローライフ指向？」

弁護士 「人生設計をきちんと考えられていたんだと察します」

息子 「どうかな。無計画に子供って、逃げ出した男ですよ」

弁護士 「……」

間。

弁護士 「このあとどうされます？」

息子 「どうって？」

弁護士 「いやその、もうお帰りになるか、それとも、しばらくここにおられてお父上を偲んでみるとか……」

息子 「だから、偲ぶほどの記憶がないんですよ」

弁護士 「なるほど」

息子 「でも、しばらくいてみようかな？葬式にも出なかったし、ほんの一瞬でも僕の家ってことにな

るわけだから」

弁護士 「そうですか、それがよろしいでしょう。遺品をながめている間に、お父上に興味がわくかもしれませぬし」

息子 「ないでしょうねえ、それは」

弁護士 「……鍵をお渡ししておきます。もし、私が戻る前にお出になるのでしたら、施錠をお願いします。後日返却していただければかまいませんので」

息子 「わかりました」

弁護士 「では、小1時間ほどしたら戻ってまいります」

弁護士、客席扉へ去る。

#2 (息子+友人)

息子が一人になると、ロッキングチェアが動く。

息子 「？」

友人、舞台へ戻ってくる。

友人 「上物は大したものじゃないな。何が建物自体が美術品だ。あの弁護士、怪しいぞ」

息子 「あ、そう」

友人 「遺されたものも、大したもんじゃない」

息子 「わかるのか、おまえに？」

友人 「そりゃあ、オレは専門家じゃないから……もしかしたら価値があるのかもしれないけど……だけど……嫌いだ！オレは嫌いだ！オール・デコだかなんだか知らないけど、暗いよ！暗い！」

息子 「わかった、わかった」

友人 「でも、これだけの土地だ。うまく転売すれば、かなりの額になる」

息子 「いくらで売れようが、おまえには関係ないだろ」

友人 「そりゃそうだけど……」

息子 「だいたい、なんでついて来たんだ？頼んでもいないのに」

友人 「だって、おまえ久しぶりの日本じゃないか。いろいろ戸惑うこともあるだろうし、それにおまえほかに友だちいないだろ」

息子 「おまえだって友だちじゃない」

友人 「じゃあ、なんだ？知り合って二十五年になる。そういうのを友だちって言うんじゃないか？」

息子 「腐れ縁だ」

友人 「幼なじみだ」

息子 「たまたまおたがいに母子家庭育ちだったから、話しやすかっただけだ」

友人 「オレはよく、おまえがイジメられているのを助けたよな」

息子 「あまり記憶がないな」

友人 「あれ、そういうこと言う？寂しいおまえの遊び相手になったり、話し相手になったりしてあげたのは、誰だった？オレだろう？」

息子 「おまえが寂しかったんじゃないのか？」

友人 「え〜、おまえ、そんな風に思ってたんだ？」

息子 「オレは寂しいなんて思ったことは一度もない」

友人 「嘘つけ」

息子 「……おまえ、ほんとに何しに来たんだ？」

友人 「励まし？」

息子 「帰れ」

友人 「帰れ？それが友だちに言うセリフか？オヤジさんが死んで、今度こそ天涯孤独になったおまえを励まして思うって、わざわざついて来てやったんだぞ。そんな善意の友だちに、おまえは帰れと言っか！」

息子 「じゃあ、頼む。帰ってくれ」

友人 「泣くんだな」

息子 「泣く？」

友人 「オレは知ってるぞ」

息子 「何を？」

友人 「おまえが泣いてたことだよ」

息子 「泣いてた？オレが？」

友人 「ああ、年中泣いてた。ひとりぼっちの部屋の中で、明かりもつけずに」

息子 「なんの話だ？」

友人 「で、結構そんな自分に酔ってた」

息子 「ふざけんな」

友人 「だから、ひとりになったらまた泣くつもりなんだろ」

息子 「泣くか、バカ」

友人 「バカ……」

友人、手を叩く。

暗転。

息子 「おい！明かりをつけろ！おい！」

暗闇で、手を叩く音。(友人)

明かりがつく。

友人の姿が舞台上から消えている。(通路の階段に腰を下ろしている)

息子 「どこ行った？！ガキみたいなことしてないで、出てこい！」

友人、手を叩く。

再び、暗転。

息子 「いい加減にしろよ。明かりをつけろ！」

友人 「……」

息子 「よくし、わかった。オレは帰るからな。ずっとそっやってる」

友人 「……」

息子 「……じゃあな！」

もう一度、暗闇の中で手を叩く音がする。(友人)

明かりがつく。

友人、ロッキンググチェアの横に立っている。

友人 「泣いてたな」

息子 「誰が？」

友人 「ごまかさなくてもいい。オレにはわかってる」

息子 「ふざけんな」

友人 「怒るな、怒るな。怒るとどんどん涙目になるぞ」

息子 「やかましい！」

友人 「ほんとに負けず嫌いだなあ、おまえは」

息子 「……どうやって明かりを消した？」

友人 「え？」

息子 「おまえ、スイッチとかいじらなかつたよな」

友人 「それは……」

息子 「どうやったんだ？」

友人 「……この部屋の照明は、音に反応する最新システムを採用しているんだ。だから、手を叩くことで、照明のオン・オフができるん……」

息子、手を叩く。

何も起こらない。

息子 「で？」

友人 「故障したんだな。ま、あんまり気にするな」

息子 「気になるだろ」

友人 「気にするな」

息子 「じゃあ、一度明かりが戻ったとき、姿を消したのは？」

友人 「消えてないって。隠れてただけ」

息子 「どこに？」

友人 「おまえの後ろ」

息子 「後ろ？」

友人 「そう、こうやって」

友人、息子の背後に移動する。

友人 「おまえは、後ろを振り返らなかった。それだけ」

息子 「気づくだろ、普通？」

友人 「それが、意外と気づかないんだよ。マジックの常套手段。一番見つけやすいところが狙い目なんだ」

息子 「ああ、そう」

友人、突然、ハツとして辺りを見回す。

友人 「……おい」

息子 「なんだ？」

友人 「誰かに見られてないか？」

息子 「……気のせいだろ」

友人 「壁に耳あり障子に目ありってな」

息子 「オレたち何か悪いことでもしてるのか？」

友人 「いや、そういうことじゃなくて……この家、何かいそうじゃない」

息子 「何かって何だよ？」

友人 「オヤジさんの幽霊とか」

息子 「幽霊(笑う)……おまえ、幽霊なんて信じるのか？」

友人 「もちろん」

息子 「へえ、意外だな」

友人 「幽霊も妖怪もUFOも、全部存在するさ」

息子 「オレは、全部認めないね」

友人 「いや、存在する。頭の中にだけどな」

息子 「頭の中？」

友人 「脳と特定してもいい」

息子 「偉そうだな」

友人 「……あのな、オレはこう見えて、結構頭いいんだぞ。本だっただくさん読んでるんだ。おまえは、基本的にオレをナメ過ぎている」

息子 「ナメられるようなことばかりしてるからだろ」

友人 「まあ、聞け」

息子 「……」

友人 「オレたちは、自分の脳の中から抜け出せない。オレがここに存在するのは、おまえがオレの存在を疑ってないからだ。オレたちは、絶対的には存在できない。誰かに存在を認めてもらって

はじめて存在できる。つまり、相対的にしか存在できないんだ」

息子 「で？」

友人 「逆の言い方をすれば、誰かがその存在を疑わなければ、それは幽霊だろうが妖怪だろうがU F Oだろうが存在するということだ」

息子 「へえ。じゃあ、オレが疑わなければ、おまえも幽霊も同じように存在してるってわけか？」

友人 「そうだ」

息子、いきなり友人の額を平手で叩く。

友人 「イテッ！何すんだよ」

息子、さらに何度も叩く。

友人 「イタイって……やめろよ……」

息子 「なんで痛いんだ？」

友人 「おまえが叩くから」

息子 「叩かれるとなんで痛いんだ？」

友人 「そりゃあ、痛みを感じるからだ」

息子 「誰が？」

友人 「……オレが」

息子 「体の痛みは誰とも共有できない。つまり、オレと関係なくおまえという実体が存在するってことだよな」

友人 「……」

息子 「幽霊は痛がるか？聞いたことないね。叩かれておでこが赤くなるか？」

友人 「え、赤くなってるのか？ひどいよ……」

息子 「いいか、幽霊には実体なんてない。つまり、存在しない」

友人 「……おまえだって夢は見るだろ？」

息子 「見るけど、それがどうした？」

友人 「夢に実体はあるか？」

息子 「ないね。だから夢なんだ」

友人 「夢はそれを見る人間の記憶の再構築だったり整理だったりする。重要な人間の活動だ」

息子 「で？」

友人 「人間の平均睡眠時間を八時間だとしてしよう。すると、一日は二十四時間だから、人間は、人生の三分の一は寝ているわけだ。で、すべてを覚えてはられないけど、オレたちはその間ずっと夢の世界を生きているんだ」

息子 「だから？」

友人 「夢に実体がないなんていったら、人生の三分の一を否定することになるんだぞ」

息子 「否定なんかしてない。寝てるだけだって言ってるんだ」

友人 「夢にも実体はあるんだよ。ただ、覚醒しているときに感じるものとは違うだけだ」

息子 「ああ、そう」

友人 「幽霊も同じだ」

息子 「どこが？」

友人 「同じさ。幽霊も、恐れ、負い目、不安なんか、目に見えるようになって現れたものだ。だから、基本的にしゃべらないし、何か言ったとしても、見た人間の知ってることしか言わない」

息子 「見たことないからわからないな」

友人 「ま、たまに未来のことを言ったりするヤツもいるようだが……それにしたって、人間の予知能力がそれを言わせてるだけだ」

息子 「予知能力？」

友人 「人間がまだ本能に従って生きていた頃には、そういう能力があったんだ。でも、人間は文明を獲得することの代償として、そういうものを失ったんだ。具体的には、本能の領域が大脳新皮質に移行して、論理的なものに取り込まれていくことによって進化したんだ……なんて」

息子 「なんて？」

友人 「やゝめた！」

息子 「考えがまとまらなくなったんだな」

友人 「……」

友人、ロッキングチェアにすわって、大きく揺らす。

息子 「壊すなよ」

友人 「なんでイスを揺らそうと思ったんだろうな」

息子 「リラックスするためだろ。ゆりかごと同じ」

友人 「揺れてるとリラックスするか？オレは気持ち悪くなってくるけど」

息子 「そんなに揺らすからだ」

友人、揺れを止める。

友人 「これ、オヤジさんの愛用のイスだったのかな？」

息子 「さあな」

友人 「なあ」

息子 「なんだ？」

友人 「おまえ、オヤジさんの記憶ってあるか？オレ、全然ないんだ、なんにも」

息子 「一緒に暮らしていた記憶は皆無だな。ただ、ものごころついてから、二回会ってる」

友人 「へえ」

息子 「でも、そいつが本当に父親だったのかはわからない。っていうか、どこの誰なのかもわからないかった」

友人 「確認がなかったんだな？」

息子 「確認なんか何もないさ」

友人 「最初に会ったのは保育園のときだろ？」

息子 「よく覚えてるな」

友人 「わりと記憶力いいんだ」

息子 「へえ」

友人 「それに、おまえにお父さんが会いに来たっていうのが、子供ながらに衝撃だった。うらやましかったのかも知れない……」

息子 「オレは、顔もよく思い出せないし、どんなこと話したのか、何をしたのかも覚えてない」

友人 「自分が子供だったから、背の高い人ってイメージがあるけど、もしかしたら、実際はおまえと同じくらいで、あんまり大きい人じゃなかったのかも」

息子 「そうだな……」

友人 「二回目は？」

息子 「……小学校三年だった。校門のところに立ってた」

友人 「四年ぶりってことか」

息子 「久しぶりだな、とか言ってたけど、こっちはとくにそいつのことなんか忘れてた。子供にとっ  
て四年ていうのは長い時間だ。永遠みたいに思える」

友人 「そのときの記憶はあるのか？」

息子 「ああ……免許証を見せながら自分が父親だってことを説明して、オレを車に乗せてその辺をド  
ライブした」

友人 「おいおい、一步間違えば、誘拐じゃねえか。知らない人について行ってはいけません、って家  
でも学校でもきつく言われてただろう」

息子 「不思議と危ないとは思わなかったんだ」

友人 「誘拐される子供は、みんなそう思っちゃうからついて行くんだ」

息子 「そうだよな」

友人 「でも、ユニークなおヤジさんだな。免許証見せて、オレはおまえの父親だって？」

息子 「ほかに方法を思いつかなかったんだろ」

友人 「話したのはのか？」

息子 「オレはずっと黙ってた。むこうは、ずっと自慢話してた。仕事の話とかいろいろして、自分  
のことを大物だっと思わせようとしたんだろうけど、オレには何の話だかよくわかんなくてさ」

友人 「ドライブしただけか？」

息子 「あとはいつに何もなかった……ぐるっとその辺を一周して、また学校の前に戻ってきた。あつ  
という間だった」

友人 「で？」

息子 「あいつは車から降りもしない。ただポケットに手をつっ込んで、一万円札を一枚引っぱり出し  
て、オレの手に握らせた。『ちよっとした記念だ。父さんがいつもお前のことを考えてるしるしさ』  
とか言ったよ……そのとき、こう思ったのを覚えてるよ——うん、やっぱり、この人がオレの  
おヤジだっって証拠なんだろうなって……オレの人生で、小遣いくれる人なんか誰一人いなかった  
からな」

友人 「金か……たしかに金くれるのが、一番わかりやすい。現実的な人だったんだな。その一万円は  
どうしたんだ？」

息子 「さあな？使ったんだろうな。オフクロにバレないように、ちよっとずつ」

友人 「イタイ話だなあ……で、金くれてそれでおしまい？」

息子 「あと、本を一冊くれた」

友人 「本？」

息子 『『ピノキオ』』

友人 「小学校3年生に『ピノキオ』？ちょっとわかってない感じだなあ。一万円くれた話には、好感持ったけど、『ピノキオ』はいただけない。ちょっと父親を演じようとして失敗したって感じだな。その本は？」

息子 「もちろん、捨てたさ。オフクロに言えないだろ。オフクロは、お父さんは死んだのよ、としか言わない人だったんだから。本当に死んだと思ってるように見えたよ」

友人 「それはウチも同じさ……それ以来オヤジさんには会ってないのか？」

息子 「ああ……ところが高校卒業のとき、突然、卒業祝いが届いた」

友人 「卒業祝い……」

息子 「五十万の小切手を送ってきた」

友人 「やっぱり金か。でも、微妙だなあ、五十万って金額。多いのか少ないのかわからない」

息子 「なあ、どう思う？オフクロの葬式にも顔を出さなかったのに……オレの高校卒業をちゃんと覚えてやがるんだ……」

友人 「なんだ、おまえ、ちょっとジーンときちゃったのか、たかが五十万で？」

息子 「いや、虚しくなったんだ、そんなヤツの子供かと思ったら」

友人 「ふうん」

息子 「家族を捨てるなら捨てるで、きっぱり捨てればいいじゃないか。好き勝手に生きたいなら、それでいい。それなのに……なんかイヤになったんだよ、とてつもなく」

友人 「その五十万は何に使った？」

息子 「……生活費で消えたさ。生きてるからには、メシ食わなきゃならないからな」

友人 「メシか……そういえば腹減ったなあ。なんか食に行かない？」

息子 「オレはいい」

友人 「そう？」

息子 「腹減ったなら食に行けよ」

友人 「まだここにいる？」

息子 「ああ」

友人 「じゃあ、ちょっと食ってくるわ」

友人、舞台から降りるが、扉へ去らずに、通路の階段に腰を下ろす。

息子はロッキングチェアに腰掛けようとする。

するとまた、触れてもいないのに、ロッキングチェアが揺れる。

息子 「――」

暗転。

何かが吸い込まれる音。

#3 (息子+父)

暗闇の中で、手を叩く音がする。(父)  
明かりがつく。

友人の姿が消えている。

息子の背後に、男が立っている。

父である。

息子、気配を感じて振り返る。

息子 「!……誰？」

父 「私だよ、私。久しぶりだな？」

息子、とっさのことに状況を把握できない。

息子 「……えくと、あの……どなたですか？」

父 「だから、私だよ、私」

息子 「どこかでお会いしましたっけ？」

父 「おいおい、父親の顔も忘れたのか？」

息子 「は？」

父 「まあ、二十年も経ってるんだ、顔を忘れていたとしても仕方ない。人間は、そういうこと忘れ  
るんだよな。本能が衰えてるんだ。ある意味動物以下だ」

息子 「あの」

父 「なんだ？」

息子 「どなたでしょうか？弁護士の話だと、法定相続人は、僕一人ということですが」

父 「ああ、私の子供はおまえ一人だ」

息子 「父に負債があったという話も聞いてません」

父 「取り立て屋なんかじゃない」

息子 「では？」

父 「だから、おまえの父さんだって」

息子 「父は、先日他界しました。死んだんです」

父 「もちろんわかってるよ、本人なんだから」

息子 「ご用件は？」

父 「ああ、そうか、信じてないんだ」

息子 「何を信じると？」

父 「仕方ないなあ。ほら、ここに免許証がある」

父、息子に運転免許証を渡す。

息子 「……」

父 「名前ぐらいは覚えてるだろう？」

息子 「どうしたんだ、これ？盗んだのか？」

父 「私のものだ。最近はほとんど運転はしなかったんで、車は売っちゃったが」

息子 「……」

父 「あ、車欲しかったのか？遺してやらなくて悪かったな」

息子 「……あんだ、ほんとに誰なんだ？」

父 「だから、父親、おまえの」

息子 「気安く、おまえ、なんて呼ぶな」

父 「父親が息子をおまえ、と呼んで何が悪い？それに、おまえは私のことを、あんだ、って呼んだぞ。もし、私が赤の他人だったら、そのほうが失礼だろう。いや、父親に対しても失礼か」

息子 「あのなあ……」

父 「なんだ、免許証見せたのに信じないのか？」

息子 「信じられるか、こんなもの」

父 「こんなもの？身分証明書として、運転免許証は絶対だ。日本全国、津々浦々、どんなところでも通用する。知ってるよな？」

息子 「免許くらい持ってる」

父 「それなら、運転免許証の信用度の高さはわかるだろう。おまえが免許取ったんだって、身分証を買ったんだろ？車もない、レンタカー借りる金もないやつに、免許なんかいらなからな」

息子 「うるさく」

父 「会社組織に所属していない人間は、パスポートか国民保険証、それに運転免許証しか、自分が誰であるかを証明できるものはないからなあ。かといって、レンタルショップなんかでパスポートや保険証出すの、恥ずかしいもんな、いい歳して」

息子 「黙れ！」

父 「おいおい、なに興奮してるんだよ。落ち着いてくれ」

父、屈託のない笑顔で息子を見つめている。

息子 「……わかった。あんだが、オレの父親だということは、ひとまず信じるでしょう」

父 「やっと信じてくれたか。でも、それでいい、あんまり簡単に人を信じてはいけなからな。

さすが、私の息子だ」

息子 「待った、待った。もう少し、聞いてくれ」

父 「いいとも、聞こうじゃないか」

息子 「オレの父親は、先日死んだんだ」

父 「さっきも言ったが、そのとおりだ」

息子 「肝臓癌だった」

父 「ああ、そんなにアルコールを飲むほうじゃなかったんだけどな。家系かも知れない」

息子 「聞いてくれ」

父 「はく」

息子 「つまり、あんたがオレの父親だとすると、死んでいるはずなんだ」  
父 「そうだとも」

息子 「となると、あんたがここにいるのはおかしい」  
父 「どうして？」

息子 「ここは天国でも地獄でもない。現実世界だ。死んだ人間はいてはいけないんだ。あんたは茶毘(だ  
び)に付されたんだ。死体は燃やされちゃったの。わかるよな？」

父 「でも、私は幽霊だから」

息子 「ふざけんな！」

父 「おまえは信じないようだが、私は紛れもなく幽霊だ」

息子 「じゃあ、なんでそんな若いんだ？死んだときは、58だったそうじゃないか」

父 「幽霊は、死んだときの年齢で出てくるわけじゃない。どうやら、年齢は好きなように決められ  
るようだ。おまえも死んでみればわかる」

息子 「ああ、そうですか」

父 「最後におまえにあったのは、ちょうどこのくらいの感じだっただろ。だから、老けた私が現れ  
ても、おまえは誰だかわからないじゃないか。最後は肝臓癌だったから、顔色も悪くてさ。そ  
んなんで、おまえに会いたくなかったから……だから、こんな感じで現れた……いや、もう少  
し若かったかもしれないけど」

息子、あきれている。

息子 「……じゃあ、質問を変えよう。なんで出てきた？」

父 「なんで、って感動のないヤツだなあ。こうしてまた父親と再会できたんだぞ、もう少し感激し  
たってよさそうなものじゃないか」

息子 「再会したら、息子に感激されるような父親だったと思うのか？」

父 「そう言われると立場ないけどな」

息子 「まあ、そんなことはどうだっていい。なんで出てきた？」

父 「だって、おまえ、私の遺したものの、全部売っちゃう気だろ。このままじゃ、私がいたことだっ  
て忘れられちゃう。それはイヤだなあって思ってたさ」

息子 「あんな……」

父 「なんだ？」

息子 「遺産目当てか何かなら、どこの誰で、どういう理由で、何がほしいか言ってくれ」

父 「だから、そんなじゃない。ほら、背丈も今のおまえに合わせて、ちょっと大きくしてみた。  
このほうが、おまえも私のことを父さんだと思いやすいと思って。ほんとは、私もおまえと大  
して背丈は変わらなかったんだ。遺伝だな」

息子 「遺伝？どこが似てるんだ、あんたとオレ？」

父 「おまえも私もきれいな顔立ちだ。さぞかし女を泣かせて来たんだろうな？私もだ」

息子 「いい加減にしないと不法侵入で警察呼ぶぞ」

父 「どうぞ。私はおまえにしか見えないんだから、何てことない」

息子 「……」

父、ロッキングチェアに腰掛ける。

息子、解決策が思い浮かばず、困惑している。

父 「私がどういう人生を送ったのか知りたいだろ？」

息子 「べつに」

父 「いや、そんなわけがない。父親に興味を持たない子供なんて、ほんとはいやしないんだ」

息子 「たくさんいると思うけどね」

父 「照れてるだけさ」

息子 「……」

父 「それに、私はこれほどのものをおまえに遺したんだ。どうやって稼いだか知っておいても、損はないぞ。貧乏なんだろう、おまえ」

息子 「余計なお世話だ」

父 「(息子の反応を無視して) 最初は証券詐欺をやった」

息子 「詐欺？」

父 「架空の会社の株を売ったんだ。詐欺のなかじゃ高級な部類だ」

息子 「何偉そうにしてんだよ。犯罪じゃないか」

父 「そう、犯罪だ。捕まったし、有罪の宣告を受けて実刑を言い渡された。もちろん、刑務所に服役した。刑務所は……とにかく寒かった」

息子 「……」

父、刑務所のことを思い出して、感慨に耽っている。

父 「(我に返って) それから……」

息子 「ちよつと待て」

父 「なんだ？」

息子 「あのな、オレはあんたを父親だとも、幽霊だとも思っていないんだ。それを前提に勝手に話を進めないでくれ」

父 「あれ、さつき私を父親だと信じるとか言ったじゃないか」

息子 「あれは、話の展開上そう言ったただけだ」

父 「うそつきなのか、おまえ？」

息子 「ちがう！」

父 「私も父親なしで育ったが、嘘はつかなかったぞ」

息子 「証券詐欺で服役していたヤツが嘘をつかなかったって？」

父 「すべてのクレタ島人は嘘つきだと、一人のクレタ島人が言った」

息子 「は？」

父 「さて、ここで問題です。クレタ島人は嘘つきか、それとも正直者か？」

息子 「何の話だ」

父 「聖書に出てくる、有名な命題だ。知らないのか？」

息子 「知るか」

父 「聖書くらい読んでおいても損はないぞ」

息子 「……」

父 「で、クレタ島人命題の答えはだが、わからない、だ。確定できないんだよ」  
息子 「だから、どうした？」

父 「息子と父親っていうのも、簡単に確定できないんだなあ、と行ってさ」

息子 「あんたが、母さんとオレを捨てて出ていかなけりゃ、簡単にわかったことだ」

父 「いやいや、一緒に暮らしてたって、本当のことは母さんにしかわからないんだぞ」

息子 「そりゃあ……」

父 「いくら、私が父親だと名乗っても、おまえが信じてくれなきゃ、どうにもならない。悲しい生き物だな、男って」

息子 「おまけにあんたは幽霊だしな」

父 「でも、まあいい。おまえも私を父親と認めてくれたようだからな」

息子 「認めてなんかいない」

父 「今、あんたが母さんとオレを捨てて出ていかなけりゃ、って言ったじゃないか。それはつまり、私を父親と見なしたという発言だと思うがね」

息子 「たとえばの話だ！」

父 「たとえばでもいいさ」

息子 「何がいいんだ？」

父 「はじまりとしては、ってことかな」

息子 「……」

父 「さて、話の続きだ。刑務所、出てからだったな」

息子 「……出てきてどうしたんだ？」

父 「お、少しは聞く気になったのか？」

息子 「ま、あんたが誰だかは、いずれはつきりさせてもらおうとして、少なくともオヤジのことを知ってるようだから、少し聞いてみるかって思っただけだ」

父 「ありがとう」

息子 「礼を言われるようなことじゃない。で？」

父 「ああ……刑務所を出所して、すぐに宝くじを買った。そのうちの一枚が当たりくじだった！」

息子 「はあ？」

父 「なんと3億さ。どうだ、すごいだろ？」

息子 「……いくら作り話をするんでも、もう少し、真実味のある話をしろよ」

父 「真実は、いつでも作り話のように聞こえるものだ。逆に、本当のように聞こえる話は、実は作り話だったりする」

息子 「聞こうなんて思ったのがバカだった……」

父 「(息子の様子にはおかまいなく) 私は、宝くじに当たった連中がよく口にするような馬鹿な科白を吐いたりはしなかった。突然手にした大金にビビって、全部寄付しかますとか、これからもずっと小さなアパートで暮らしますって誓うヤツとか、いるだろう。私はそんな馬鹿じゃない。金ってのは人生を変えちまう。金が多ければ多いほど、変化も大きくなるんだ。それにこっち

はもう、賞金をどう使うかも決めてあった。いまさら頭をひねる必要なんかなかった。結論ははじめから決まっていたんだ」

息子 「……」

父 「だけど正直な話、まさかここまでうまく行くとは思ってなかった。はじめは銀だった。次がユーロダラー。それから商品市場。ジャンク債、超伝導体。で、最後が不動産。何に手を出してもかならず利益が上がった。しかも、それを全部一人でやってのけたんだぞ。誰の手も借りずにな」

息子 「……」

父 「だが、私も寿命にはかなわない。正々堂々と勝負して勝ったのに、結局は負けるんだ。死という負けがやってくる。正義もへったくれもありゃしない」

息子、帰ろうとする。

父 「おい、どこ行くんだ？」

息子 「帰るんだよ、あんたのくだらん作り話に付き合ってるほどヒマじゃないんだ」

父 「男には作り話が必要なんだ。大昔からずっとそうだ」

息子 「ああ、そう」

父 「英語で神話のことをMYTH（ミス）って言うんだけどな、そのMYTHには作り話という意味もある」

息子 「いつまでも作り話してろ」

息子、舞台から下りて、客席扉へ向かう。

父 「……あのとときの一万円、何に使った？」

息子 「え？」

父 「一万円だよ、小学校に会いに行ったとき、車の中でやったろ」

息子 「……」

すきま風の音。

息子、舞台に戻ってくる。

父 「何に使った？」

息子 「なんで、あの一万円のことを知ってるんだ？」

父 「おまえに金をやったのは、たったの二回だからな、忘れないさ」

息子 「……」

父 「で、何に使ったんだ？」

息子 「……使わずに、ずっとしまっておいた。今でも持ってる」

父 「箱に入れてか？」

息子 「……！」

父 「金を使わずに持ってるなんて、間抜けのすることだ。金なんてただの紙切れだ。箱なんかに入

息子 「……」

父 「金の本当の強みは、いろんな物を与えてくれることではなく、金のことを考えずに済む余裕をもたらしてくれることだ」

息子 「そんな大金持ったことねえよ」

父 「高校卒業のときにも、小切手送ったよな、五十万の」

息子 「……」

父 「受け取ってないのか？」

息子 「受け取った……」

父 「そうか、それはよかった。まさか貯金とかしたんじゃないだろうな？」

息子 「……五十万全部、宝くじを買った。当たらなかったけどな」

父 「はっはっは、宝くじか！やっぱり血は争えないな」

息子 「やめろよ！」

父 「どうした？」

息子 「……」

父 「おい、どうしたんだよ？」

息子 「……母さんの名前は？」

父 「なんだ、いきなり」

息子 「いいから答えろ」

父 「アキコ」

息子 「字は？」

父 「顕著のケンに子供のコだ」

息子 「旧姓は？」

父 「坂本」

息子 「誕生日」

父 「五月十六日」

息子 「千支は？何年生まれだった？」

父 「あいつは申（さる）だった」

息子 「……」

息子、黙り込む。

父 「もういいのか？」

息子 「ああ……」

父 「そっだ、おまえに見せたいものがある」

父、舞台を下りて、客席扉へ向かう。

息子、父の後を追う。

父 「こっちだ」

父と息子が、客席扉の外へ去った瞬間、明かりが消える。

音楽。

暗転。

#4 息子+友人

すぐに照明が戻る。

ロッキングチェアが揺れている。

友人が、客席通路に立っている。

まるで人形のように動かない。

そこへ息子が、真っ黒に塗り潰された油絵を持って戻ってくる。

父はついてこない。

音楽が消える。

友人、途端に生氣を取り戻し、快活に喋り始める。

友人 「どこへ行ってたんだよ？帰っちゃったのかと思って心配したぞ」

息子 「戻って来てくれて良かったか？」

友人 「なんだよ、それ(絵)？」

息子 「さあな、奥の部屋にあった」

友人 「価値あるのか？」

息子 「どうかな」

友人 「じゃあ、なんで持ってきた？」

息子 「なんか気になって」

友人 「オヤジさんが描いたのか？」

息子 「わからない」

友人 「それにしても、こんな家にひとり住んで、そんな真っ黒な絵ながめて……ある意味、捨てられてよかったんじゃないか」

息子 「よかった？」

友人 「きっと偏屈で自分勝手に陰険な男だったに違いない。そんなヤツと一緒に暮らしても、きっとうまくいかなかったさ」

息子 「そうかな……」

友人 「そうだよ、決まってる！」

息子 「どうしておまえにわかる？」

友人 「オレはおまえのことならなんでもわかるんだ」

息子 「なんで？」

友人 「おまえはオレで、オレはおまえだからだ」

息子 「は？」

友人 「おまえとオレは双子のようなんだと思ってる」

息子 「やめろよ、気持ち悪い」

友人 「だって、そうだろ。おまえとオレだけだったもんな、保育園のとき、母子家庭だったのって」

息子 「覚えてない」

友人 「オレは覚えてるよ。それまでは、ほとんど家の中にいたから気づかなかったけど、保育園に入ってから、よそのウチにはパパとママがいるのが普通なのに、ウチは普通じゃないんだって思い知らされた……だから、おまえが同じだってわかって、ほんとにうれしかった。おまえがいなかったら、つらかったと思っつな」

息子 「……でも、双子だと思っつのはやめてくれ」

友人 「どうして？」

息子 「二卵性にしても似てなさすぎる」

友人 「オレは、精神的なことを問題にしてるんだ」

息子 「だったらなおさらだ」

友人 「……おまえ、もしかして、オレのこと嫌い？」

息子 「今頃気がついたのか？」

友人 「……ま、そういうことをジョークとして問題なく言える間柄ってことだな」

息子 「そうやって、なんでも自分に都合いいように考えられる、おまえの才能には敬服するよ」

友人 「それはどうも」

息子、**絵を床に置き、ロッキングチェアにすわってながめる。**

友人 「なあ、本当はオヤジさんのことどう思っつてたんだ？」

息子 「どうして？」

友人 「興味ないとか、赤の他人だったとか言っつてるけど、本当は思っつとこあるんだろ？」

息子 「思っつとこねえ……」

友人 「答えろよ」

息子 「おまえはどうなんだ？」

友人 「はつきり言っつて、オレはオヤジを憎んでる。オフクロを孕ませたっつていうその一点でね。よく世間じゃ生まれてきたことに感謝しろとか言っつうけど、生まれてきたことなんか、なんの意味がある？何も無いさ。何もなさないんだからな、ほとんどの人間は。もちろん、オレもおまえも何かなしたりはしない。この歳になれば、そんなこと十分わかる……オレたちの人生なんて、何の意味ない。できることなんて、せいぜい、オヤジとオフクロがやったことを繰り返さないようにしようと思っつただけだ。だいたい、オフクロから聞かされたけど、もともと、オレはオヤジが酔っばらっつてできた子なんだ。オフクロも産むっつつもりはなかつたっつて、ことあるたびに言われた。それどころか、オレがオヤジに似ているからっつて、憎まれもした。だっつたら生むなよ。自分たちの気持ちよさを優先して、子供できるようなことするなよ！」

息子 「……」

友人 「オレは父親になんかなるっつつもりはまっつたくないね。ただでさえ人口増加で食料不足なんだ。こ

れ以上子供増やしてどうするんだよ。人間が増えれば、エネルギーは消費するし、環境破壊も進む。これ以上の経済発展が何になるんだ？老人たちが、自分たちを養ってもらえるように騙くらかしてるだけじゃないか。何も世界の一等国になんかなる必要はないんだ。そこそこ豊かにそこそこ楽しく暮らせればいいじゃないか。だいたい、人口が減れば、その分住むところも広くなるし、通勤ラッシュも車の渋滞もなくなるんだぞ。人口半減！これこそ、現在政府がやらなきゃならないことだろ」

息子、黒く塗りつぶされた絵を見つめたまま、あまり熱心に聞いていない。

友人

「……どうしたんだよ。いつものおまえらしくないな。なんか言い返すとか、賛同するとかしてくれないと、バカみたいじゃない、オレ。あつい青春野郎みたい……せめて、青年の主張にでも出るのか？とかチャチャくらい入れてくれないとさ。おい！」

「あ、ごめん、全然聞いてなかった」

「え、全然？」

友人

「ああ、考え事してた」

友人

「……オレがいない間に何かあったのか？」

息子

「べつに」

友人

「あ！今からオレに冷たくしておいて、遺産が入ったら自分だけいい思いしようって言うんじゃないだろうな？」

息子

「オレが遺産をどうしようが、おまえには関係ないことだろ」

友人

「心配なんだよ」

息子

「余計なお世話だ」

友人

「なんだと？それが二十五年来の友だちに対する言葉か？」

息子

「……金目当てだったんだろ」

友人

「何のことだ？」

息子

「おまえ、今、仕事何してる？」

友人

「え、ああ……」

息子

「言えよ」

友人

「……失業中」

息子

「だろうと思った」

友人

「でも、充電期間だから、これから羽ばたくための」

息子

「何が「羽ばたく」だよ。オレもおまえも何かなしたりはしない……オレたちの人生なんて、何の意味ない、とか言ったばっかりだろ」

友人

「なんだ、聞いてたんじゃないか、オレの話」

息子

「何が、励まし、だ。何が25年来の友人だ。遺産のおこぼれが欲しいだけなんだろ？」

友人

「そんなことないって」

息子

「いいんだよ。だからって、別におまえのこと人非人（にんびにん）だなんて思わないから」

友人

「……」

息子

「人間の行動を規定しているのは経済だ。金だ。友情だって、親子の愛情だって、みんなそうだ」

友人 「おまえの言うこと、わからないわけじゃないけど……」

息子 「オレは、それがイヤだって言ってるんじゃない。そのほうがよっぽどわかりやすい」

友人 「それは、オレだってそう思うさ……だけど、オレは違うぞ。オレは本当におまえのことが心配でさ。それで、何か経済的な援助をしてもらいたいとかいう下心なんか、全然ないから」

息子 「……」

友人 「いや、もしちょっと助けてくれるなら、拒むつもりはないけど……」

息子 「ほらみる。だったら最初からちゃんとそう言え。いくらほしいんだ？」

友人 「だから、そういうことじゃないんだって！わからないかなあ、オレの友情が」

息子 「(とても冷淡に)うるさいな、どっか行けよ」

友人 「……」

友人、手を叩く。

暗転。

息子、手を叩くと照明が戻る。

友人の姿は消えている。

#5 (息子+父)

客席通路を、父が歩いている。

父、舞台上上がってくる。

父 「どうだ、その絵？」

息子 「いろんな絵の具が交ざっているようだけど……洞窟の中を描いたのかな……孤独を感じた」

父 「ヘンリー・ミラーが馬を描いていた」

息子 「え？」

父 「でも、どうも気に入らない。で、描いた馬の上にもまた馬を描いてみた。それでも納得がいかない。で、どんどん上塗りをしていったら、とうとう最後にキャンバスが真っ黒になってしまった。

その真っ黒のキャンバスにミラーは白絵の具で、"horse"と描いた」

息子 「で？」

父 「それだけのことさ。本当は失敗作。その絵だって、孤独なんか表しちゃいない」

息子 「あんたが描いたのか？」

父 「その絵を描いたのは、私のオヤジだ。おまえのじいさん」

息子 「え？」

父 「じいさんがいたなんて、考えたこともなかったろ。でも、おまえが存在するってことは、私がいて、私のオヤジがいて、そのまたオヤジがいてってことなんだ。突然、そこらへんからわいて出てきたわけじゃない」

息子 「当たり前だ」

父 「でも、その当たり前前のごとがどうにも信じられない。私もそうだった」

息子 「……」

父 「私がオヤジに興味を持ったのは、死んでからだだった。その絵を眺めて、そういえばこの人どんな人だったんだろうって、そのときやつと考えたんだよ」

息子 「じいさんの遺した絵か……」

息子、また絵を見つめる。

父 「おまえのじいさんも、家にいつかない人だった。小金を貯めちゃ、絵を描きに海外へ行っていた。それも無計画。家のことなんかほったらかしさ」

息子 「実はオレも基本的には海外で暮らしてるんだ……」

父 「へえ、それは知らなかったな」

息子 「バイトしてある程度金が貯まったら行って、金がなくなるまでいる」

父 「どこ？」

息子 「東南アジア専門」

父 「一人で？」

息子 「もちろん」

父 「何しに行くんだ？」

息子 「べつに何も」

父 「べつに何もってことはないだろう」

息子 「本当に何するわけでもないんだ。安いアパート借りて、仕事しないで、ただダラダラしてる」

父 「知り合いがいるのか？」

息子 「いや」

父 「ダラダラ何してるんだ？」

息子 「本読んだり、ネットやったり……一人でできることしてる」

父 「何のためにそんなことしてるんだ？」

息子 「群れるの嫌いなんだ。できたらずっとひとりでいたい……でも、日本じゃ言葉が通じるってだけで、本当の意味でひとりになんかなれない。でも海外へ出ちゃえば、言葉は通じないし、知らないヤツばかりだ。その方がよっぽど楽だ。人間関係に煩わされることがない。オレは誰にも煩わされずに生きていたいんだ」

父 「外こもり、って言うんだろ、それ」

息子 「そんな風に言われてるのは知ってる」

父 「でも、元来、オスとはそういうもんだ。人間に一番近いゴリラだって、繁殖の時期にはメスを求めて集まってくるが、それが過ぎたら、ジャングルの中でそれぞれ十分に距離をとって、一匹一匹なるべく顔を会わさないように暮らしている。だから、人間のオスだって、元々はそうだったに違いない。で、それは正しいことなんだ。私もそうしてきた」

息子 「自分のことを正当化してるだけじゃないのか？」

父 「おまえだって同じじゃないか」

息子 「だからって、仲間だなんて思うなよ」

父 「仲間じゃない。親子だ。で、私の知る限り、家系でもある」

息子 「なんか納得しづらいな」

父 「だけど、一人で海外出るのでエネルギーいるだろう。なんで引きこもらなかったんだ？」

息子 「引きこもれるような環境がないだろう。そんなことしたら、すぐ餓死だ」

父 「そうだったな」

息子 「東南アジア専門なのも安いから。同じ金額で、よその何倍も持つ」

父 「おまえの行動基準は、なんでもそれだな」

息子 「経済的なこと以外に、人間の行動を規定するものなんてないさ」

父 「わかったようなこと言うな」

息子 「だってそうだろう。芸術家でもない限り、大多数の人間の目的は、いかに働かずに楽しんでネコみたいに暮らすかじゃないか。あんただってそうやって生きてきたんだろ？」

父 「否定はできない」

息子 「あんたみたいに宝くじが当たらないかなあ。3億、いや1億でもいい。それを手に入れたら、もうなんの心配もない。あんたはさらに儲けようと思って、いろいろと投資してみたんだけど、オレはそれほど欲深じゃないんだ。誰にも邪魔されず、並の暮らしができればそれで十分。思う存分、引きこもってやる」

父 「……」

息子 「安いもんだよ、ほとんどの人間の人生なんて。だろ？」

父 「ああ、そうだな」

息子、父を見つめる。

息子 「……なんで母さんとオレを捨てたんだ？」

父 「おまえは、私に捨てられたと思ってるのか？」

息子 「捨てたじゃないか」

父 「私が捨てられたんだよ、母さんとおまえに」

息子 「……」

父 「それに、おまえも私に捨てられたって思うより、私のことを捨てたんだって考えると楽になれるぞ。私はそうした」

息子 「……」

父 「……『ピノキオ』のこと覚えてるか？」

息子 「ああ……どうして『ピノキオ』だったんだ？」

父 「『ディズニー』に翻案される前の『ピノキオ』では、ジェペットは神様に子供をください、なんて祈ったりしないんだ。ただ単に木切れを彫って息子を作る。木切れの中にすでにピノキオはいる。ジェペットは、ピノキオが現れるまで余分な木を削るだけだ。まさにその存在を見つけたすことだ。言い換えれば、自分自身を見つけてることなんだ……『ピノキオ』は、ピノキオが父を探す物語であり、同時にジェペットが息子を探す物語でもあるんだ」

息子 「で？」

父 「なんて言うかな、私はおまえに見つけてほしいと思ったってことかな。ジェペットがフカの腹の中でピノキオに見つけ出されるようにさ」

息子 「今になって無理矢理こじつけるなよ」

父 「こじつけじゃない。本当にそう思ってたんだ。でもまあ、こうして死んでから見つけてもらっても虚しいことは虚しいんだけど……それでも、見つけてもらえたら生きてたことの証になる……おまえも誰かに見つけてもらえればいいな、幽霊とか怪しい友だちとかにじゃなく」

息子 「オレは生きてるように見えない……?」

父 「おまえは、繭の中にいるサナギだ」

息子 「オレはもう三十になる」

父 「年齢は関係ないだろ」

息子、ロッキングチェアにすわる。

音楽。

父、揺りかごを揺らすように、ロッキングチェアを揺する。

息子、ゆっくりと眠りにつくように目を閉じる。

# 6 (息子十弁護士)

音楽が消える。

客席扉から、弁護士が大きな封筒と缶ビールを手に戻ってくる。

父、ロッキングチェアを揺らすのをやめる。

息子、目を開く。

弁護士 「お待たせしました。別件でてこずりました」

息子、父と弁護士を交互に見る。

驚いたことに、弁護士には父の姿が見えないらしい。

父、口の前に人差し指を一本立てて、「何も言うな」というサインを送り、客席扉へ去る。もちろん、弁護士は父の行動にまったく反応しない。

弁護士 「まずはこれ(ビール)を。喉が渴いたでしょう」

息子 「ありがとうございます」

弁護士 「私も今日は仕事はこれでおしまいなので」

息子 「おつかれさまでした」

弁護士 「あ、どうも」

息子「あの……」

弁護士 「なんでしょう?」

息子 「いや……いいです」

二人、ビールを飲む。

弁護士、息子に封筒を渡す。

弁護士 「それから、これ」

息子 「……(封筒を開ける)」

弁護士 「葬儀のときに使用したお父上の写真です」

息子 「！」

弁護士 「実際は引き伸ばして使わせていただきました」

写真には、紛れもなく目の前で黙っている父の姿があった。

息子、写真をみつめている。

弁護士、ビールを飲んでいる。

弁護士 「今は、どちらにお住まいですか？もしなんでしょうしたらお送りしますが」

息子 「……まだここにいってもいいですか？場合によっては泊まっても？」

弁護士 「どうぞ、どうぞ、かまいませんよ。お通夜でもする気になりましたか？」

息子 「そんなんじゃないかもしれませんが……」

弁護士 「電気はもちろん、ガスも水道も止めていませんので。もちろん、ベッドもお使いくださってか  
まいません」

息子 「ありがとうございます」

弁護士 「何か必要なものは？」

息子 「いえ」

弁護士 「わかりました」

二人、ビールを飲む。

息子 「あの」

弁護士 「なんでしょう？」

息子 「子供さんはいらっしやるんですか？」

弁護士 「私、ですか？」

息子 「ええ」

弁護士 「おりますが」

息子 「息子さん？」

弁護士 「ええ、息子が一人です」

息子 「どんな感じですか、息子さんとの関係？」

弁護士 「感じ……まあ、普通ですかね。良くも悪くもないと思います」

息子 「そうですか……」

二人、会話が弾まず、ビールを飲む。

弁護士 「ああ……子供を育てる方が、年老いた親の面倒を見るより、はるかに金がかかるもんです」

息子 「なるほど」

弁護士 「でも、それはまったく理解されてないでしょうね」

息子 「教育がなっていないんじゃないですか？」

弁護士 「それもあるでしょう。だけど、どこもそんなものだと思います。しよせん父親なんて、一滴の

精液提供者。どこの馬の骨って思われてるくらいがちょうどいいんじゃないですかね。そのほうが家庭はうまくいきます」

息子 「息子さんと話をしたりするもんですか？」

弁護士 「しませんね、ほとんど」

息子 「ですよね普通……って僕は普通を知らないんだけど」

「子供にとつては、父親なんて、ずっと一緒に暮らしてようが幽霊みたいなもんでしょうね。それじゃなかったら、金を運んでくる機械。父親がどんな人生送って来たかなんて、子供には興味ない。興味が出てきた頃には、すでに死んでたりするわけです。まあ、それがイヤだったら父親なんかにならなきゃいいだけの話ですが……酔っぱらったついでに、気持ちいいことしたくなつて、その結果、一大家族とローンに縛られても、幸せだなあ、とか思えるくらい樂觀的じゃなければやれないですよ、父親なんて」

息子 「なるほど、父親になるには樂觀的なほうが向いているんですね」

「だって、たとえばひとりの男がいて、その男は健康そのもの。年老いてもいないし、これといって病気の経験もない。すべてはいままでのままであり、これからもこのままであるように思える。男は一日また一日と歩みを進め、一つ一つ自分の務めを果たし、目の前に控えた人生のことだけを夢みている。そしてそれから、突然、死が訪れる。ひとりの人間がふつと小さなため息をもらし、椅子に座ったまま崩れおちる。それが死です。あまりの唐突さに、思考が入り込む余地もなければ、慰めの言葉を探す余裕もない。我々に残されるのは死だけであり、私自身もいつかは死ぬのだという厳然たる事実だけです」

息子 「……」

「だったら、好き勝手に生きたほうがいいと思うじゃないですか。結婚もせず、子供も作らず。私も当初はそういうつもりでした。」

息子 「へえ」

「ところが、あるときふとした気の迷いで、この女を幸せにするのが自分の使命だ、とか思ってしまったって」

息子 「奥さんですね」

「ええ。それで結婚したら、今度は子供を作って幸せな家庭を作ることが、私の究極の仕事なんではないかと思ひ、家を購入し、子供を作りました」

息子 「ポジティブですね」

弁護士 「ところが、実際家庭ができてみると、なんだか違うと思うようになりました」

息子 「何が違ったんですか？」

「結局、しよせん、私は夢を見ていただけで、実際の家庭というものは、そんなものよりもっと現実的で、いやなことがたくさんある」

息子 「たとえば？」

弁護士 「そこは、家族の恥にもなるので具体的には……」

息子 「ああ、そうですね」

弁護士 「で、落ち込みました。家へ帰るのが苦痛になる。だから、なるべく用事を入れて、家での滞在時間を短くしようと思いました。本当に寝るだけ、タッチ・アンド・ゴーの世界です。事務所に寝泊まりすることもあったし、ホテルを転々としたり……こんなことなら、どこかに部屋を借りようかと思ったくらいです」

息子 「……」

弁護士 「でも、ほんとにときどき、ほんの些細なことで、実感することがあるんです。誰かの父親になるってのは、宝くじに当たるより奇跡的な確率だって」

息子 「どういつときぎっ」

弁護士 「笑わないでくださいね。風呂場で息子に陰毛が生えているのを見たとき、ちよつと涙が出ちゃったんですよ。陰毛ですよ、陰毛。しかも息子の……よくぞここまで大きくなったもんだって

……なんかうれしくって」

息子 「……」

弁護士 「なんで涙が出るのか、自分でも信じられませんでした。ただ、あんな気持ちはほかでは味わったことがない。これは断言できます」

父が客席通路に現れる。

息子、気配を感じて振り返る。

弁護士 「すみません、つまらないことをしゃべりました」

息子 「とんでもない」

弁護士 「では、私はそろそろ」

息子 「あ……」

弁護士 「明日、またまいります。おやすみなさい」

息子 「おやすみなさい……」

弁護士、客席扉へ去る。

# 7 (息子十父十友人)

父、舞台へ上がってくる。

父 「あいつもかわいいそうなヤツだ」

息子 「どうして？」

父 「本当は息子なんかいないんだ」

息子 「え？」

父 「今聞かされた話は、全部、作り話だ」

息子 「まさか……」

父 「奥さんは最初の妊娠のかなり危険時期に流産して、そのときの医者の手不慮で、子供を産めない体になった……それなのに、あの夫婦は息子がいるものとして生活してる。いまでも生まれ

てくる子のために買ったベビー用品が家中に置かれているそうだ」

息子 「手で触れられる幽霊……」

父 「え？」

息子 「死んだ人間の遺していったものを、遺品と言わずにそんな風に呼んできた」

父 「そうか……生活のすべてが作り話なんだよ、あの家は。死んだ息子の話を作り続けることで、どうにか生きている。作り話がでなくなったら、現実も崩壊してしまうんだろうな。」

息子 「ああ……」

友人が戻ってくる。

驚いたことに、友人には父が見えるらしい。

友人 「『ヴァージニア・ウルフなんてこわくない』の話か？」

息子 「え？」

友人 「エドワード・オールビーの戯曲だ。死んだ息子が今でも生きてるってことにして暮らしてる夫婦の話。映画にもなってる。エリザベス・テーラーとリチャード・バートン主演。当時、ほんとの夫婦だったんじゃないかな、あの二人」

息子 「いや、映画の話じゃなくて、あの弁護士の実話……」

友人 「まさかあ！そんな夫婦が実際にいるわけないだろ。お話だよ、お話」

息子 「でも……」

友人 「ところで誰、この人？」

息子 「え？」

友人 「親戚の人？」

息子 「あつ……見えるのか、おまえ？」

友人 「何へんなこと言ってるんだよ。(父に) どうも初めまして。友人です、やつの」

父 「ああ、どうも、父です、こいつの」

友人 「ああ、お父さんでしたか、それはどうも失礼しました……え！」

父 「ああ、幽霊です」

友人 「幽霊？」

父 「ええ、まあ」

友人 「うわー、幽霊なんだ！本物？本物？」

息子 「本当に見えるのか……？」

友人 「だから、何言ってるんだよ、おまえ？(父に) 握手してもらえますか？」

友人、無理矢理、父の手を握る。

友人 「びっくりしたあー握手できないのかと思ったら、しっかり手応えがあるんじゃない。まるで生きてるみたいですね」

父 「……」

友人 「もしかして、ほんとに生きてるんじゃない？」

息子 「え？」

友人 「いくら、オレが幽霊の存在を信じてるからといって、こんなリアルな幽霊がいるとは、ちょっと想像できないなあ」

息子 「でも、弁護士にはこの人のこと見えないようだったし、それにオレとオヤジしか知らないようなこともいろいろ知ってる……」

友人 「たとえば？」

息子 「母さんの名前とか、誕生日とか」

友人 「そんなの調べりやすぐわかる。ほかには？」

息子 「一万円のことや卒業祝いのこと、『ピノキオ』のこと……」

友人 「おまえがここでオレに話してるのを、どこかで聞いてたんじゃないのか？」

息子 「だけど、だけど……そうだ、この人はいきなり現れた」

友人 「へえ」

息子 「おまえが外に出ていったら、いきなりオレの背後に現れたんだよ」

友人 「隠れてたんでしょう？おまえを騙すのなんか簡単だからな。オレが隠れたときも気づかなかったじゃないか」

息子 「でも……」

友人 「それに、弁護士には見えなかったって言うけど、弁護士が見えないふりしてたのかもよ」

息子 「！」

友人 「あの子、幽霊は頭の中にいるの。こんなしつかりした実体があるのは、幽霊じゃないに決まってるじゃないか。だいたい、幽霊なんて信じないっていったのはおまえだぞ」

息子、父を見る。

父、無表情のまま黙っている。

息子 「どういうことだ？」

父 「……」

息子 「答えるー！」

父 「……」

友人 「こんな風に考えられないか？弁護士とこの人は、オレたちにはかなわないかも知れないけど、なんだかすげえ深い知り合いでさ、おまえのオヤジさんの遺産を、どうにかして手に入れようとしているとか、なんとか。あいつだって、弁護士かどうかわからないぞ。詐欺師とかさ」

息子 「あ……」

友人 「あ、じゃないよ。しつかりしてくれ。場合によったら、オヤジさん、こいつらに殺されたのかもよ」

息子 「……！」

友人 「おまえさ、オヤジさんの葬式に出なかったんだろ？」

息子 「出てない……」

友人 「葬式なんかなかったのかもしれない。ここで殺されて、遺体は、まだこの家のどこかに放置されたままとか」

息子 「まさか……」

友人 「まったくおまえは、母子家庭育ちのくせに、ちっとも世間の荒波に揉まれてないからなあ。オレがついてなきや、どこで足元すくわれるかわかったもんじゃな」

息子 「……」

友人 「なあ、おっさん、そういうわけで、もうネタはバレてるんだ。本当のことを教えてくれよ」

父 「……」

友人 「なんとか言えよ！」

父 「(#4の息子の口調に酷似した言い方で)うるさいな、おまえ」

友人 「なに？」

父 「おとなしくしないで、存在消すぞ」

友人 「へえ、やってみろよ」

不意に、父は片手で友人の首を絞める。

抵抗する友人。

しかし、父の力は思いのほか強く、徐々に友人の動きが鈍くなる。

呆然とする息子。

友人は、やがて床に崩れ落ち、動かなくなる。

突然、息子は恐怖に取り憑かれる。

父、ロッキングチェアに腰掛け、ゆっくりと揺らす。

息子、携帯電話を出す。

父 「なんでそんなもの持つてるんだ？電話する相手もメールする相手もないんだろ？」

息子 「警察を呼ぶ」

父 「どうぞ。でも、恥かくのはおまえだぞ。オレもこいつ(友人)もおまえにしか見えない」

息子 「なんだと?!」

父 「もういい加減一人遊びはやめたほうがいい」

息子 「なんのことだ？」

父 「こいつはおまえが頭の中に飼ってるペットだろ。都合のいいときに呼び出して、相手をさせる。

邪魔になったら、すぐに消す」

息子 「黙れ！こいつとは腐れ縁だけど、幼なじみなんだ。保育園からずっと一緒だった……」

父 「今までだって、何度も殺したんじゃないのか？おまえの気分次第で」

息子 「なんだと？」

父 「認めたくなければ、それでもいい。でも、試しに起きろって思ってみろ。すぐに立ち上がってくる」

息子、恐る恐る友人を見る。

友人、不意に起きあがる。

息子 「！」

友人 「上物は大したものじゃないな。何が建物自体が美術品だ。あの弁護士、怪しいぞ」

息子 「……」

友人 「おまえとオレは双子のようなもんだと思ってる」

息子 「よせ……」

友人 「そりゃあ、オレは専門家じゃないから……もしかしたら価値があるのかもしいけど……だ  
けど……嫌いだ！オレは嫌いだ！アール・デコだかなんだか知らないけど、暗いよ！暗い！」

息子 「やめてくれ……」

友人 「おまえはオレで、オレはおまえだからだ」

息子 「……」

すきま風の音が大きくなる。

友人、息子に近づく。

友人

「はつきり言って、オレはオヤジを憎んでいる。オフクロを孕ませたっていうその一点でね。よ  
く世間じゃ生まれてきたことに感謝しろとか言うけど、生まれてきたことなんか、なんの意  
味がある？何もないさ。何もなさなんだからな、ほとんどの人間は。もちろん、オレもおま  
えも何かなしたりはしない。この歳になれば、そんなこと十分わかる……オレたちの人生なんて、  
何の意味ない。できることなんて、せいぜい、オヤジとオフクロがやったことを繰り返さない  
ようにしようと思うだけだ。だいたい、オフクロから聞かされたけど、もともと、オレはオヤ  
ジが酔っぱらってできた子なんだ。オフクロも産むつもりはなかったって、ことあるたびに言  
われた。それどころか、オレがオヤジに似ているからって、憎まれもした。だったら生むなよ。  
自分たちの気持ちよさを優先して、子供できるようなことするなよ！」

息子 「消えろ！」

突然、照明が強烈に光る。

同時に何かが吸い込まれるような音が響き渡り、友人の足元の床が開き、友人はその中に消える。

照明が元に戻る。

すきま風の音が聞こえている。

息子、膝を抱えてうずくまっている。

息子 「……」

父 「いい加減に繭から出たらどうだ」

息子 「……何の話だ？」

父 「社会が豊かになると、つい繭から出そびれてしまうサナギが多くなる。おまえもそうだ。ゆっ  
くり繭の中にいた」

息子 「……」

父 「たまにはそういう人間がいてもいい。でも、いつまでもそれじゃダメだ。人間はひとりでなん  
か生きていけない。ゴリラでも仙人でもない。孤独になんかなれやしない。ただ、誰からも相  
手にされずにさびしいだけだ」

息子 「……」

父 「難儀だよなあ。誰にも邪魔されずにひとりで生きていっていいのに、この世に生まれたってことは、オヤジがいてオフクロがいるってことだ。最初から孤独なんてヤツはいないんだ。孤独は人間が発明した幻想にすぎない。親子で捨てたとか捨てられたとか言っても、ひよんなことで顔を合わせたりする。地球上に人間が65億人だかいるらしいが、65億分の1の確率どころじゃない濃い関係なんだからな。どうしたって逃れられない。本当に嫌気がさす」

息子 「……どうしてオレに何か遺したいと思ったんだ？死んでもからも無関係でいてくれればよかったんだ」

父 「愛しいんだよ、おまえが。たとえ顔を合わせなくても、触れなくても、ずっとそうだった。私の中に、いつもおまえがいた。おまえのなかに私がいるんじゃない。私の中におまえがいるんだ」

息子 「逆だろ」

父 「逆？」

息子 「オレの意志と関わりなく、オレの中にいるのはあんたの方じゃないか。だから、愛おしいと思うんだろ。しよせん、自己愛の変形にすぎない」

父 「遺伝子のことを言ってるのか？」

息子 「ああ。オレはあんたの遺伝子なんかほしくなかった。それなのに、あんたの遺伝子がなければオレは存在しない。こんな矛盾があるか？オレの体の中には、あんたの血が流れてるんだ！オレにはそれが何より我慢できない！」

父 「どうしたい？」

息子 「……」

父 「我慢できないならどうしたいんだ？」

息子 「だから……どうしようもないんだよ！」

父 「おまえはここに何をしにきたんだ？」

息子 「え？」

父 「弁護士に呼び出されたからか？何かを確かめたいと思ったからじゃないのか？」

息子 「……」

父 「おまえに何か遺したいっていうのは、私の勝手だ。だいたい、遺産や形見を遺したからって、それが意味を持つわけじゃない。私のことを考える契機になるかもしれないが、すぐにおまえはその物に慣れてしまう。私の時計をして時間を知り、私のイスにすわり、私のベッドで眠る。で、何かを感じたとしても、それは幻影でしかない。すぐに私のことなど感じなくなる。そして、遅かれ早かれ、物は壊れ、すり切れ、捨てることになる。そのとき、そこに何か意味があるように思えるか？怪しいものさ」

息子 「……」

父 「なのに、何かを遺したい。私を見つけてほしい……」

息子 「……」

父 「でも、それもすべておまえしただ。こっちからは何もできないんだ」

息子 「勝手なことばかり言うな」

父 「……」

息子 「オレがあんたを探さなかったとでも思うのか？」

父 「……」

息子 「探したさ、もちろん。中学生の時、家まで辿り着いたことがある。でも、あんたはいなかった。ちょうど引越したところだと言われた」

父 「……」

息子 「あんたは逃げるんだ。いくら追いかけても逃げる。ルールのないかくれんぼみたいなものだ。こっちはずっと探しているのに、勝手に家へ帰っちゃうようなヤツじゃないか」

父 「……」

息子 「反則だろ、そんなの。探してほしいんだったら、少なくとも探せるところにいろよ！」

父 「……」

息子 「オレにとってあんたの生き方は、言ってみれば死の予習だ。あんたはずっと見えない人間だった。現実的に何のつながりも持てない。つまり、最初から死んでるんだ。ここに来たんだって、それを確認しに来ただけだ。あんたが本当に死んで、もう探す必要はないんだって確認するために来たんだ。それなのに、幽霊になって出てきて、私を見つけてほしい……、だと？勝手なことを言うな！」

父 「……」

息子 『ピノキオ』を何回読んだと思う？自分でもわからないくらい読んださ。あんたと繋がれる唯一のものだったんだからな。全部暗記するまで読んだ」

父 「……」

息子 『さあ、お父さん、ぐずぐずしちゃいられませんよ。逃げなくちゃなりません』

『逃げるって！どうやって？』

『フカの口から海に飛び込むのです』

『うまい話だ。だがなピノキオや、わしは泳げないんだよ』

『かまいませんとも！僕の背中にまたがってくれば、僕、泳ぎの名人だから、ぶじに海岸まで連れて行ってあげましょう』

『ぼかばかしい、坊や！』とジエベットはクビを振って、悲しそうに微笑みながら答えました。

『おまえのような、背丈一メートルそこそこのあやつり人形に、わしをおぶって泳ぐほどの力があると思ってるのかね？』

『ものほためしですよ！どうせ死ななくちゃならない運命なら、一緒に死ぬのがせめてもの慰めになるじゃありませんか』

それ以上何も言わずに、ピノキオは口ウソクを手にとって、行く手を照らすため先に進みながら、お父さんに言いました。

『僕のあとについてらっしゃい。心配はいりません』

息子、絶句する。

父、息子に近づき、息子を抱きしめる。

息子 「……」

父 「どうしたい？」

息子 「……あんたこそ、どうされたいんだ？」

父 「それはわかっている」

息子 「じゃあ、教えてくれ……」

父 「……葬ってもらいたい。おまえの手で、私の物語をきちんと終わらせてほしいんだ」

息子 「……」

父 「おまえだっけそうしたいんじゃないのか？そうすれば、おまえは繭から出て、自分の物語を生  
きることができる」

息子 「……」

音楽。

父は、息子の前にひざまずく。

息子、父の首に手をかける。

二人は一瞬見つめ合う。

息子、手に力を込める。

父、はじめはじっとしているが、やがて抵抗を始める。

息子、さらに力を込め、父に馬乗りになりながら、抱きしめるように首を絞め続ける。

やがて、父は動かなくなる。

ゆっくりと身を離す息子。

暗転。

#E (息子＋弁護士)

照明がつく。

かすかにロッキングチェアが揺れている。

座面に黒い絵が立てかけられている。

客席扉から、息子と弁護士が現れる。

弁護士 「では、この絵とロッキングチェアをしばらくお預かりすればよろしいんですね」

息子 「お願いします。いろいろ整理がいたら、すぐに引き取りに行きますので」

弁護士 「お任せください」

息子 「ありがとうございます」

弁護士 「でも、どうしてこの2点をお選びになったんですか？」

息子 「高価なものじゃなくなっただけですか？」

弁護士 「いや、その……」

息子 「見る目がないってことになっておいてください」

弁護士 「わかりました」

息子 「わざわざ車まで手配してくださって、本当にありがとうございました。息子さん、カーマニア  
なんですか？」

弁護士 「誰にも運転させないんですよ。私も車の運転はあまり得意ではないので、最近によく運転手を  
してもらっています」

息子 「そうですね」

弁護士 「あの車は、あいつが初めて手に入れた、自分の城なんでしょうね。司法試験の浪人中なのに、自分でローンを抱えても買いたいということなんで、許可しました。ま、ローンを抱えるっていうのは、悪いことではないと私は思っています。ある意味、自分の未来を信じるってことですから」

息子 「本当にポジティブですね」

弁護士 「それに、ローンを抱えることによって、何のために働いているのかがはっきりする。ローンでもなければ、自分の仕事に意味を見い出すなんて難しいことですからね。何のために働いているのか？なんてことに疑問を持つより、あのローン、このローンを支払うために働いているんだ、って考えるほうがわかりやすいでしょ。実際、私はそうでした」

息子 「……」

弁護士 「だいたい、イギリスのことわざに、『一番好きなことを仕事に選んではいけない』っていうのがあるんですが、その通りだと思います。私も、本当は弁護士なんかではなく、絵を描きたかったんですがね、それでは生きていけない。それに、人生なんて、借金を返すためにあるようなものですから」

息子 「どうして？」

弁護士 「だって、最初にすべて与えられてるわけでしょ、私たちは」

息子 「……」

弁護士 「あ、すみません。また余計なことをしゃべって」

息子 「でも、息子さんあんなに大きいなんて驚きました。もう、大学も卒業されていたんですね」

弁護士 「私が26歳のときの子供ですから……あなたの父親であってもおかしくない年齢なんですよ、私」

息子 「見えませんね」

弁護士 「それはありがとうございます。まいりますか？（ロッキングチェアを持つとうとする）」

息子 「あ、そっちは僕が」

弁護士 「そうですか？では」

弁護士、黒い絵を運び出す。

息子、ロッキングチェアを担ぎ上げる。

暗転。

..... [以上]

鈴木勝秀 (suzukatz.)